


 書評

長嶺敬彦 著

抗精神病薬の「身体副作用」がわかる

The Third Disease

中村 純

精神科は「身体」に着目する時代に—内科医からのメッセージ

第2世代抗精神病薬のインパクト

統合失調症に対する薬物療法が始まって50年余り経ったが、その発展は副作用克服の戦いの歴史ともいえる。

1996年にわが国にも第2世代抗精神病薬(非定型抗精神病薬)の導入がなされて、現在までに5剤(リスペリドン、オランザピン、クエチアピン、ペロスピロン、アリピプラゾール)の新しい抗精神病薬の使用が可能となった。

これらは錐体外路症状の出現が比較的少なく、陽性症状のみならず陰性症状にも効果を示す薬剤として注目を浴びている。しかも統合失調症の治療戦略として、治療初期からリハビリテーション期を見据えた生活指導と薬物療法の併用によって良好な予後を期待できるようになった。これらの新しい抗精神病薬は「患者中心の精神医療」へと医師や家族の意識を向けたのである。

新しい副作用＝内科疾患への着目

従来からの抗精神病薬は、パーキンソン症候群、水中毒など抗ドーパミン作用と関連した副作用や、抗ヒスタミン作用による過鎮静、抗 α 作用による起立性低血圧などを起こしていたが、第2世代抗精神病薬の導入によってこれらの副作用発症は激減し、患者のQOLは改善され、服薬のコンプライアンスは上がり、再燃が減少するなどの良い循環もみられるようになった。

とはいえ、新しい抗精神病薬も万能ではない。人によっては、循環器系、呼吸器系、消化器系、特に内分泌系の副作用である肥満、糖尿病、メタボリック症候群など、最悪の場合には死に至る可能性を有する重症の内科疾患が発症することが指摘されている。精神科医は精神症状の変化だけでなく、以前に増して身体合併症

へも関心を向けなければならなくなったのである。

「精神科病棟をいちばん歩いている内科医」

このような統合失調症に対する薬物療法の変革のなかで、精神科病院の患者と向き合い、精神科医、看護師などとの連携ができる内科医がいたらどんなに素晴らしいことだろうか。

精神科病院に勤務されている内科医も多いが、私が知っている内科医のなかで最も統合失調症の患者さんを診て、精神科薬物療法に精通している内科医は本書の著者である長嶺敬彦先生ではないだろうか。

自称、「精神科病棟をいちばん歩いている内科医」である長嶺先生が実際に発見し、治療した抗精神病薬による副作用を呈した患者さんからの経験が、本書には豊富にまとめられている。したがって、第2世代抗精神病薬に関連した副作用だけでなく、従来からの抗精神病薬による副作用も含めて、実践的な対応が随所に書かれている。

医局に一冊あれば多くの副作用に対応できる

本書は、非常にわかりやすい。さらに内科医が書いた抗精神病薬を理解する本としてユニークである。糖尿病との比較など、内科医としての統合失調症に対する理解は、精神科医にとっても新鮮な意識を与えてくれ、興味深いものがある。

これからの精神科医は薬物療法の変化に加えて、内科や外科など精神科以外の場所でも統合失調症を診る機会も増えることが予想されるため、身体合併症に対する理解も必要である。

精神科病院の医局に本書があれば、抗精神病薬による副作用の多くは対処できるのではないかと思います。ぜひご一読を勧める。

(産業医科大学精神医学教室)

●B5 200頁 2006 定価2,520円(本体2,400円+税) 医学書院